水牛通信　毎月1回10日発行　1983年5月10日発行　通巻47号　1980年5月23日第三種郵便物認可

水牛通信

VOL.5 NO.5
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ

日本の友人たちへの手紙　スラチャイ・ジャンティマトン　2
詩　カラワン　スラチャイ・ジャンティマトン　9
神の道化をめぐるおしゃべり　志沢小夜子編　16
水牛楽団のページ　18
セタガヤママ放送局日記　平野公子　大橋正子　20
コンマからピリオドへ打ち直す　花村健一　23
父権的ロシアの女のたたかい　タチャーナ・マモーノヴァ　26

⬅スラチャイ

日本の友人たちへの手紙

スラチャイ・ジャンティマトン

ぼくの国は、東南アジアの中のちっぽけな国だ。ちっぽけだというのは面積のことばかりではない。大多数の国民の暮らしむき、それに国際社会での威信ということも含めてのことだ。世界地図か地球儀の上でながめれば、もっと小さな国があることも確かだけれど、さらに大きな国ぐにと比べれば、ほんの小さな点にすぎないようなものだ。タイ国の主権者であるタイ人ほどにタイをよく知っている人ならば、この国がこの不確実な時代の問題を山ほどかかえていると言うことだろう。

問題……問題。ラテンアメリカ、中東、アフリカ、ヨーロッパ、東南アジア、どこをとっても問題のないところはない。どの神さまもまだ解決してくれたことがない、生きのびるための問題、民衆の生活の向上の問題である。よくいうではないか、生きているかぎり問題があり、問題があるからこそ生きているのだ、と。学んで、考えて、答えを探しださねばならない。よりよい生活のためには、すすんで考え、すすんで行動し、すすんで死を賭し、すすんで戦う。生まれながらにして貧困と負債の軛につながれ、何らかの圧力のもとにおかれることに満足する者はいない。戦って、戦って、生きることへの光を見いださねばならない。たとえそれがささやかな光であっても、暗闇よりはましだ。

ぼくの国は、昼より夜のほうが長くて、女が男より多い。壁や牢獄が次々に生まれてくる。うす汚ないねずみの大群が人間を喰いものにしている。毎日路傍で死んでいく犬がいても、その死体や悪臭を気にかける人もいない。コンクリートのビル街や、バス停、歩道橋を飾っているのは乞食だ。街を一歩出れば、そこは貧しい農民たちでいっぱいだ。そして日々、子供たちが、大人たちから貧困を学び、受け継ぐために生まれてくる。その一方では、生まれながらにして何もせずに巨万の富に恵まれているような連中もいる。

ぼくの国にはいい道路が沢山ある。日本の車の人気は大変なもので、どこでも手に入るほどだ。車ばかりではない。どっちを向いても、日本の商品ばかりだ。一見したところ、ぼくの国は大変な金持ちで、世界中を買いとることもできそうに見える。けれども違うのだ。ぼくにはよく分っている。ぼくの国には何もない。ただ世界の趨勢に合わせて、ゼイタクにふるまうのが好きなだけなのだ。

摩訶不思議な話がぼくの国には沢山ある。法の番人が殺人者で、悪人が社会的地位を得る。あこぎな連中だけがけたはずれて金持だ。巨大なダムから送られてくる高圧線は、農民の頭の上を素通りする。貧しい農村には電気を使うチャンスはない（彼らは灯油ランプを使っている）。電気は、都市の大きなホテルや、金持や外国人のためにあるバー、ナイト・クラブ、それに日本や台湾、アメリカ資本の工場などに送られてくるのだ。

この国では、金さえあればほしいものが何でも手に入る。飲物、料理、女。女たちは現在、輸出品目の最たるものだ。金を払うだけで、彼女たちはいつでもあなたの首に腕を巻きつけてくるだろう。ぼくはこのような女たちと知りあったことがある。本当は彼女たちも普通の人間なのだ。他の人たちと同じように、もっといい生活を求めているだけの。けれども、生きていくための必然が、彼女たちに、いくばくでもない円やドルで、肉体と魂を売り渡さざるをえなくさせている。

このような人たちは、どこから大量にやって来るのか。ぼくは以前書いたことがある。農民の息子、娘たちは、水飢饉で破産した村むらからやって来て、「男たちは生きるために労働を売り、女たちは食うために身体を売る」と。鉄道の駅やバスターミナルに行けば、ぼくたちの故郷イサーン（東北地方）から職を求め

⬅カラワン

て出て来た人びとが、ゴロゴロ横になっているのに出くわす。ぼくは彼らを責めようとは思わない。初めてバンコクに出て来たときのぼく自身も、現在の彼らとほとんど変わるところがないからである。

農村について語るならば、まずぼくたちカラワンのメンバーも農村で生まれ、農村から出て来たのだ、ということを知ってもらわねばならない。田舎の人間が都会で教育を続けることを熱望するのは、現代という時代の風俗なのだ。どの親も、子供たちが旦那衆と呼ばれる身分になって、両親祖父母たちが営んできた苦しい生活を一転させて、楽な生活がおくれるようにしてくれることを望んでいる。そしてさらに、知識と教養を身につけて、田舎の人びとを助けてくれるように、とも。

ぼくたちは都会に出て教育を受けるということは果した。ただし第一の願望、人の上にたつ旦那衆になるという点では全く望みはない。何故ならば、人は誰も、人の主人となるべく生まれてくるのではない、と思うからだ。だからぼくたちは、この不公平な社会を痛烈に叩く。貧しいか豊かであるかにかかわらず、人としての存在は平等であるという意識から、ぼくらは、あらゆる権力を断固否定する。

第二の願望については、もちろんぼくたちは自分たちの田舎のために、何か手助けになりたいと願っている。けれどもぼくらだけでは、何もなしえないだろう。ただひとつできること、それはぼくらが以前からなじんできたこと、彼らのために歌をうたうことだ。この歌声が、お互いに理解し合い、助け合うことを呼びかける声となることを願って。そうでなければ、今までたびたび起こった、想像もつかないような流血の惨事がまた起きるだろう。そのたびにぼくたちは悲しむ。

いずれにせよぼくたちにできることはあまり多くはない。ぼくたちの親兄弟たちは、今でも貧しいままだ。たとえばくらがロビン・フッドやジェシー・ジェームズになったとしても、歌をうたい続けていくこと以外にできることは少ない……いずれの日にか生命が尽きるまで。ぼくたちは農村が将来よくなることを願っている。生活レベル、教育、保健衛生、国の福祉政策などすべてにおいて。

事実は、田舎の人間は、この世の中の多くの人びとが理解しているように愚鈍でも、野蛮人でもない、ということである。彼らにも裕福な人びとと同様、頭脳があり考えがある。ただ違うのはチャンスと生まれだ

⬅モンコン

けなのだ。
彼らは文字が読めないかもしれない。電気のスイッチが使えないかもしれない。水洗トイレの使い方が分らないかもしれない。テレビがつけられないかもしれない。けれども魚をとる。獣を射とめる。田や畑を作る。そんな彼らを、誰が愚鈍と呼べるだろうか。
人はそれぞれ違った生まれ方をして、違った育ち方をするのだ。けれどもぼくの国では、農村について学ぼうという姿勢がなかった。そればかりか、農民を価値のない低い身分と蔑んできた。
ぼくたちは農村で生まれ、農村で育った。そして困難な状況のもとで教育を受けた。何故なら、それは必死の思いで求めなければ得られないものだからだ。こうした生活の中で学んだことは、教室で学んだことより大きかった。ぼくたちは一九七三年のタイ民衆の闘争の中から生まれ育ったのだ。それは驚嘆に価する闘争だった。ぼくの生涯にとって、最も大きな意味のある。現在、この運動の血を受け継いだ者たちは、あらゆるところに散らばっている。困難な時を経て、生気に満ちあふれ、かつ苦渋をかみしめながら……。
ぼくたちは、この世界のどこからであっても、正義を求める歌声を愛する。現代は、あたりまえの人びとが声をあげる時代だ。彼ら自身の言葉、彼ら自身の言語で、正義を受する世界の兄弟たちが聴いて考えてくれるように。信じこませようとさそいかけるどんな宣伝文句にも、ぼくたちの生き方を左右されてはならない。
ぼくたちは、現代という時代が不可避的に浸透した純農村地帯の出身だ。生まれついて出逢ったのがこのような社会だった。ぼくたちは保守主義者でもないし、エレクトロニクスの申し子でもない。ぼくらはぼくら自身であるにすぎない……機械が巨大な唸り声をあげている時代に、牛車を駆って進む第三世界の貧民のキャラバン。近代化した世界にはお慶び申し上げる。すべてのことが人類の利益と幸せにつながるように。貧しい国ぐにから多くを得ている方々にもお慶び申し上げる。もしもまだ足りないと思われるなら、残念至極だと申し上げたい……。

カラワン

スラチャイ・ジャンティマトン

朝の森に光がさして
あらゆる植物をやさしく暖める
おいで兄弟たち、そして同胞よ
ぼくたちの声で目を覚ましておくれ
カラワン、カラワン……地を這うような

機械化の時代、貧民の牛車のキャラバンは
二本の足踏みしめ、この空のもとを進む
神々の眠る時代に
焚火のあかりのもとで生まれ
浮かれたのはプラスティック・バンド
メイドイン　ジャパン　アンド　ユーエスエー

目を欺く影のような
虚偽の大海に囲まれて

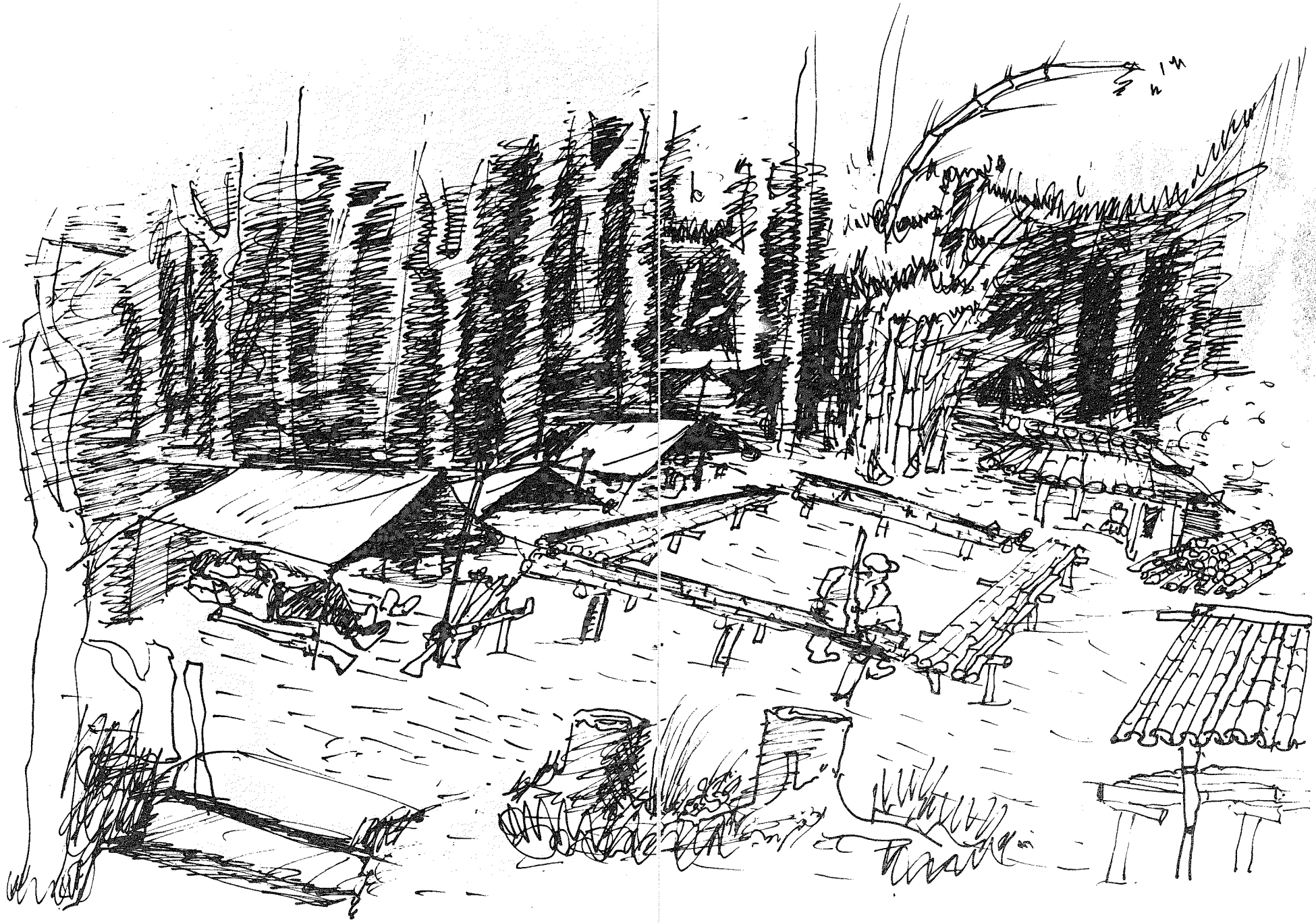
貧民の隊列はたちあがった
父よ母よ兄弟たちよ
すさんだこころで殺しあうのはやめよう
カラワンの歌声を聴いてごらん

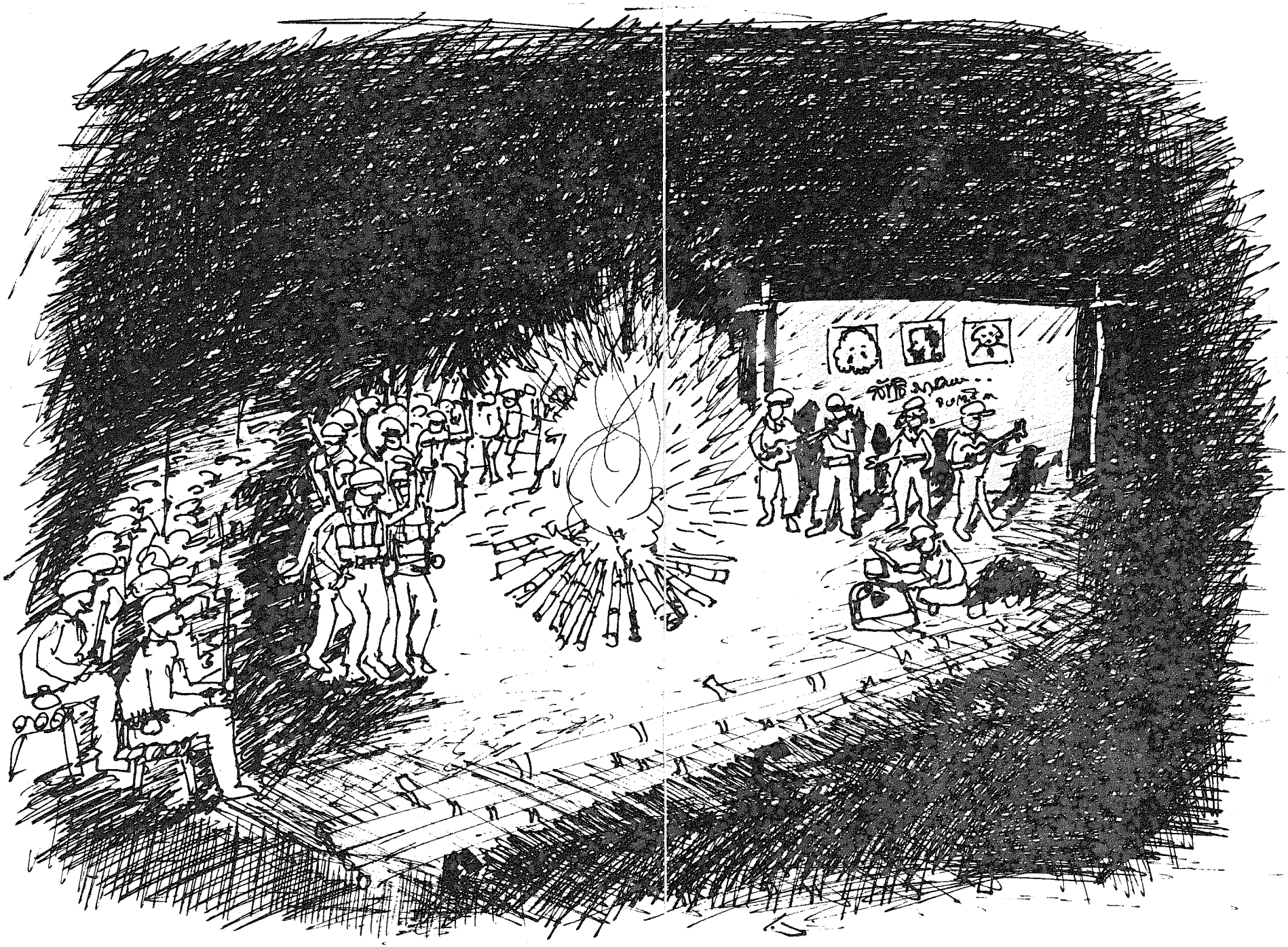
つぎのあたった汚れたズボン
すわってギターをかなでるのは
傾きかけたオンボロ家
はきづめの靴一足のビンボーぐらし
故郷グラーの乾いた川では
老人ばかりが夢をみる
たとえ雨が燃え　火は消えても
牛車の歌は敗北をうたわない
長い旅路　行列つくり
男も女も肩並べ
行こう、同じこころの人たち
この車の輪はもう戻れない（くりかえし）

グラー、グラー

「空に雨滴なく、地さらに乾いた砂あるのみ
涙のすじは血となって　地をひたす……」

朝の森に　光がさして
あらゆる植物をやさしく暖める
おいで兄弟たち、そして同胞よ
ぼくたちの声で目を覚ましておくれ
カラワン、カラワン……
カラワン、カラワン……





「神の道化」をめぐるおしゃべり

志沢小夜子編

志沢　水牛楽団のニジンスキー・パフォーマンス「神の道化」を最終日に見に行った。その時の感想をお二人に聞かせてもらいたいの。湯沢さんも蓮沼さんも、給料もらっている仕事だけではなく、いわば運動の楽しみ方を知っている人と見て、ここへひっぱってきちゃったわけだけど、どんなことをしてるの？

湯沢　被爆朝鮮人をテーマにして盛善吉さんという人が『世界の人へ』という映画を撮ったんだけど、その上映事務局をみんなでワイワイやっているのと、原発に反対する小さなグループを作って、職場や地域で、これも楽しんでやっている。まあ、好きなんだね。どっちかというと使命感みたいなものではなくて、自分が居心地よく運動できるやり方ってものを、自分のスタイルで作りだしたいと思ってる。

　それと『世界の人へ』の上映会をやっていくなかで、黄バンドという日・朝の若者が一緒にやっているバンドと知り合いになったということもあって、そのリーダーの黄佑哲さんは在日朝鮮人なんだけど、朝鮮の歌や自作の歌をうたうコンサートとセットで、いまは上映会をやっているわけです。

蓮沼　時々、ハイキングなんかやって、面白く生きてるって感じだね。だけどシャキッとする時は、わりとみんなガンバリきくし、いい関係だよね。

志沢　私もそばで見ているけど、いつもうれしそうでサ、すごくいいよね。

　さて、本題に入るんだけど、今までの水牛楽団とちがって、不思議な雰囲気がただよっていて、私は楽しめた。でも、だれかさん、ピアノ聞きながら寝てたでしょ。そのあたりのことからはじめてくれないかな。

※

湯沢　ホラ、ホラ、寝るなよ。こんな雰囲気のなかで、よく寝むれるねェ。まわりから非難の視線が突き刺ってくる。

蓮沼　それは、場慣れしていないきみのコンプレックスだよ。さあ、第二部の始まりだよ。

湯沢　ニジンスキーの日記の朗読。お世辞にもうまい読み方とはいえないね。でも、センテンスが短いから、とても動的な感じを受ける。見てごらんよ。スライドのニジンスキーに合わせて、なんとかそっくりのポーズを取ろうとしてる楽団員たちの、あの真剣な顔。

　フラッシュだ。みんなのポーズを写真に撮ってる。撮った写真と、フラッシュの光のどちらに意味があるんだろうか。ボクはきっと光の方だと思う。光は体のなかに入りこんで、内なる「神」とやらを照らしだしてくれるのではないかな。

蓮沼　あっ、人形が出てきた（柳生まちこ製作のペトルーシカ人形）。人形なのに、へんに生々しい存在感があるなア！

湯沢　あの人形と仲良くなるには、ずいぶんと時間がかかりそうだ。

蓮沼　人形が歩き出した。

湯沢　雪のシーンだ。雪の冷たさを感じる〝崖のふち〟というのは絶望のことだろうか。落ちそうになるのを助けた〝木〟は、暖い心のことだろうか。

湯沢　あ、田川律さんが走っている。

湯沢　高橋悠治さんがピアノの上に登ってしまった。ピアニストがピアノの上でねそべっている。心配だよ。落ちつかないよ。早くポーズを決めればいいのに。ああ、あの、そうじゃないってば！

蓮沼　キミは、なんという常識で塗り固められた男なんだ。

湯沢　どうとでも言うがいいさ。

蓮沼　また、雪のシーンだ。

湯沢　雪の白と血の赤が、目の前にはっきりと見える。雪の冷たさとニジンスキーの心の寒さが同化している。血の赤はなにを意味しているんだろう。

蓮沼　「生」じゃないのかな。雪は「死」だよ。

湯沢　それでは、「神」は？

蓮沼　生きるために必要な気力だよ。

湯沢　日本人だとこういう場面ではホトケさまが出てくるんだろうね。宮沢賢治の童話みたいに。神という存在の大きさはうまく理解できない。仏のほうがやさしさを感じる。神は冷厳で、仏は慈悲なのかな。

蓮沼　戦争の踊りが始まった。仮面とドラ。シッ、静かに。最後の場面だ。

　〝どこにでもわたしの家があり、どこにでもわたしはすめる〟というのは、すべてから解き放されて自由になった心を言っているのだろうか。

湯沢　パフォーマンスは終った。初めてのものに対するという恐怖心はあったけれども、それを乗りこえる作業というのも楽しいものだったよ。いつの間にか物語の中に入りこんでしまっていた。まだ雪の冷たさが蘇ってくる。思い出すと身ぶるいがする。血の赤も目に浮かぶ。この経験を反芻してみることが必要だね。反芻することによって、心の中でもっと大きなイメージが湧いてきそうだ。

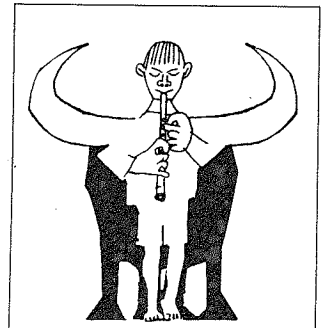
※

志沢の日記。

　パフォーマンスが終って、そとに出ると、かなりの雨だった。雨は冷たく淋しかった。

「この世界のむこうがわに光はない。だから死とそのむこうがわにあるものがこわい。光がほしい、きらめく星の光が。きらめく星はいのち、きらめかない星は死だ。きがついてみると、にんげんでもきらめきのない人たちがおおい。」

　ニジンスキーはさらに、ひとりぼっちのときほんとうのことがわかってたとも記していたっけ。きらめかない人間にはなりたくないと私も叫びだしたくなった。なんだかくたびれて、ひとりぼっちのような気がした。ニジンスキーにあたっちゃったのかな。



水牛楽団のページ

ことしの最初の自主コンサート「神の道化」は、渋谷の欧日協会ユーロスペースで三月二十七、二十八、二十九日の三日連続という、水牛楽団としてははじめてのこころみ。自分たちでチケットを売っていても、どれだけの人が観にきてくれるか、その感触がまったくつかめない。結果として、日曜日をふくむ三日間とも、定員をこえる百人以上があつまった。

一部はコンサートだが、歌は一曲もない。フルート、ピアノの独奏曲以外は、冗談のようにうまれた。クラッシックの曲は長すぎるから、サワリの部分だけにしたらどうなるかというはなしから「牧神の午後おりたたみ」ができた。今ではレパートリーになっているアウ合奏、あし笛のうけもちの音を五人にわけて、ひとつの曲を合奏するというやりかたをピアノに応用したのが五手連弾。林光さんはこのはなしをおもしろがって、いそがしいさなかに作曲してくださったのだった。もう一曲の五手連弾「バラの精」には田川律の「バラの精のおどり」がついて、会場から声がかかった日もあった。

去年モンコン・ウトックがきたとき以来の練習量の成果、二部のパフォーマンスでは、それぞれ人形つかい、プロンプター、木、星、馬、男などの役になったり、岩にみたてたピアノの上でニジンスキーのポーズをまねてみたり、……と、はじめての経験ばかりで、いつもの「音楽」から解きはなたれたようだった。

ニジンスキーをやってみようという発想からして奇抜なものだが、それに何の異議もとなえないばかりか、全員たのしく練習にはげんでいるのをみて（自分もそのひとりなのだが）やっぱりみんなかわってるなあと今さらながら思ったものだ。

マイクをつかわなくてもよい会場に百人ぐらいの観客というのが、いまの水牛楽団にはいちばんふさわしいようだ。去年の「どぶろくコンサート」もそうだった。たとえば五百人の会場を満員にして一回やるよりは、今度のように百人の会場で五回やったほうがいいだろう。

この「神の道化」は、構成をすこしかえて六月に再演することになった。予定は次のとおり。

六月九日、渋谷ジャンジャン
六月二十一日、大阪バナナホール
六月二十二、二十三日、沖縄ジャン・ジャン

自主コンサートのあとは、しばらくヒマなはずだったが、ちょうど春闘と統一地方選挙の時期で、それに関係した集会やコンサートが多く、急にいくつか応援に出かけることとなった。応援したのか、されたのか……。

四月五日は総評全国一般東京地方本部主催の「4・5統一ストに結集しよう！」社会文化会館。労働者の集会で演奏するのは久しぶりだ。「不屈の民」「ヤネク・ヴィシニエフスキーは死んだ」など、前もってリクエストされていた曲をうたう。集会は実にてきはきとすすみ、みんなはデモに出発しはじめたので、「日本のワレサ」の異名をもつ全国一般南部支部長設楽清嗣氏に、またよんでね、といって別れた。

四月十八日、全水道橋の水道会館で山谷統一労組の集会に友情出演。タイ、ポーランド、チリ、水牛楽団オリジナル曲など十曲ほど、越冬闘争のとき、われわれといっしょに山谷に行く、とはりきって待っていながらおもいのかなわなかった（くわしくは2月号のこのページを！）インドネシアの作曲家フランキーが、偶然また東京にいたので、さそっていっしょにでかけた。山谷でないのが残念ではあった。でも顔みしりはふえたかんじだ。

四月二十二日、荻窪駅近くの「スギナミ・オブジェクション」で夜8時からのコンサート。小室等さんの企画で、出演は友部正人と水牛楽団。料金三〇〇円は安いなあと思ったら、あとでちゃんとカンパ用カゴが回されて、あつまった五万円近くの、まあ、ほとんどをわれわれがいただいてしまったのだった。八十人は入れて、時間を気にしないで演奏ができて、おわってからもみんなでお酒がのめて、小室さんもついうたったりして、コンサートのつづきもできるようなスペースはたいせつだ。選挙事務所としての役割をおえたあともスペースとしてのこそうというかんがえがあるらしい。のこるといいと思う。

四月二十六日、秋山邦晴構成「現代音楽にいま何が起っている？」全八回連続セミナーの第六夜「政治と音楽——カルデューの通路」欧日協会ユーロスペース。高橋悠治のはなしと、カルデューのピアノ曲演奏、それに水牛楽団が3曲。政治と音楽というテーマはいつもわれわれについてまわるが、それをうまくことばで説明することは、今も、これからも、できないだろうと思う。だからこういう講義のあとはスッキリしない。きいている人もスッキリしないにちがいない。

四月二十八日に三里塚にでかけた。三里塚のひとにきいてもらいたくて、よばれたわけでもないのに、いきます。と言ったら、反対同盟新聞編集部が主催してくれることになった。お昼すぎに小泉英政さんの家について、ごはんをごちそうになり、横堀の反対同盟と前田俊彦さんの家に寄った。昼のうち畔道で演奏するつもりだったが、雨がふってきてダメになる。コンサートは東峰共同出荷場で夜8時ごろからはじまった。前田さんのどぶろくと、お酒、たけのことふきの煮物などのおいしいおつまみがでて、演奏するのもきくのも、のみくいしながら。いつもの歌に、「よねの歌」や、夕方小泉さんにうたってもらって採譜した「反対同盟歌」もいれる。たけのこ、山うど、ふき、それにらっきょう漬などを楽器といっしょに車のトランクにいれて、三里塚をでたのは十二時近かった。こういう一日をもてるのが水牛楽団の財産だ。

今きまっているこれからの予定は、

五月上旬、福山敦夫は愛用のピンをかかえて、単身北海道へ歌の出稼ぎにゆく。

五月三十一日、崔哲教さんを支える松戸市民の会集会。崔さんが「政治犯」としてとらえられて九年になる。

七月九日、生活クラブ生協海老名配送センターオープニングの催しのひとつとしてのコンサート。三時から。プログラムはまだきまっていない。

九月のはじめから三週間ほどの予定でカラワン楽団をよぶことにした。水牛楽団とのコンサートを、東京、甲府、松本、大阪、横浜、川崎などで企画交渉中である。くわしい日程はまたこのページで発表することになるだろう。彼らが日本に来てなにをおもうか、いまからたのしみだ。ことしはカラワン楽団結成十年目、水牛楽団も五年目になった。

（八巻美恵）

セタガヤママ放送局日記

平野公子
大橋正子

3月24日
ラジオ放送局開始。放送時間、開店日（水・日休み）の二時三〇分～三時の三〇分間。今日はあいにくのどしゃぶり。二軒は聞いていると思う。
まず店で一番売れている作業着の話しを。子どもの服をリフォームで作りました。その型紙を一部百円で売ります。
それに三学期の終業日なので、子どもの持ち帰った通信簿のこと。
放送の途中で、伊藤さん、片手に傘、片手にトランジスターラジオを持って来店。「聞こえました。聞こえました！」で一安心。

3月25日
本の紹介。ちくまぶっくす『育児力』――貸本にしますので、子育て中のお母さん、ぜひ、借りに来てください。
ピンクのシャツができあがりました。

3月26日
中学生の男の子たちに手伝ってもらって、部屋のペンキ塗りをしながら放送。
商品の価格は、「もし自分が買うなら」というところで決めているので、原価＋手間×3方式の価格はつけていません。
テープ音楽、水牛楽団。
お産の話。三人目にしてやっと「お産」というものはすごくいいものだという心境になりました。

3月29日
一日の家事の量について、ぐち。
子どもの一日の過ごし方、何時に起きようが、いつ、ウンコをしようが、何時に学校に行こうが、親は立ち入らないよ。学校も立ち入るな。
テープ音楽、柳ジョージ、アフリカの愛。

3月31日
詩、音話にこだわってきたということはなぜかな、と考えたことあれこれ。
お客さんが多いので、そのまま店内放送。

4月1日
大雨。店の中、あちこちで雨もりがしています。今日、黒テントの新井純さんが持ってきた「赤いキャバレー」公演のチラシを、すぐお知らせします。
これからのセタガヤ・ママ商品計画の会議を実況放送。

4月2日
布を仕入れに行ってきた報告をします。
柳生まち子さんの人形の見本ができ上ったので、本人が人形について話します。
途中で近所の二年生のひろ子ちゃん、自作の歌を歌う。
魚河岸から届いた、カニ、マグロ、イワシ、イカのお知らせ。即売。

4月4日
『思想の科学』4月号の案内。特集の中から、竹内尚代さんの「朝をみるまえに」のこと。このあと『思想の科学』を買いに来た人、三人。

4月5日
静かな雨の日なので、「国について　歌について」のコンサートのテープの中から、石垣りんさんの詩とお話の部分を放送。
このテープは1回100円で貸し出します。希望者続出。

4月7日
桜の花が咲きました。桜の花は年をとるほど好きになります。
お店にくるお客さんの話。おばあさんがモンペを買いにきてくれたら、その友達のおばさんも、ジャコとモンペを買いにきてくれた

4月8日
男の子と女の子は育て方じゃなくて、もともと違うみたいという話。
女の子は強くて、男の子は大そう外と内とが違うもんだ。茨木のり子詩集『寸志』の中から朗読。
店から四軒先の佐藤家にどろぼうが入りました。被害はサイフ一つ。中味は一万円強。御用心！

4月9日
「世田谷村の人々」① 店のまわりの家に昔からいた、今は年老いた人々のことを物語に書いて、読みました。

4月11日
小学一年生になった三矢君に、一年生になった感想をインタビュー。
店にもらった桐のタンスの中から出てきた二十年前の新聞を読む。二十年前の教科書問題。
若い二人のお母さんと子育てについて話す。

4月12日
晴。風強し。虫のいどころが悪いのか、アカンボがマイクをかじり防害。泣き声がひどいので放送できず。工藤直子詩集『てつがくのライオン』より詩の朗読だけします。

4月14日
雨。今年、中学に入った子どもが、小学校最後の学級会で「多数決って不公平じゃないか」と提案したら、一日中学級会になってしまったという話。
テープ。矢野あき子の童謡。

4月15日
商品の案内をしていたら、セタガヤママの家主のおじさん酔って来店。そのまま、おじさんと私たちの会話を放送。店のとなりはいま建築中、おじさんはとび職なので、当世風の見なれない建材が運びこまれるのが気になるらしい。
「あの建材は何という代物か聞いてきてくれ。俺はあんな間尺の建材は作ったことネエ。ホレ横文字が書いてあるだろ、あんたたち、読んでみてくれ。ホレ、サッシ入りのパネルじゃんか。まあ簡単な代物よネー。パタパタっておっ建っちまうわさ」

4月16日
となりのお嫁さん、放送中にパウンドケーキを買いに見える。昨日、建材が運びこまれましたよ。自分の家がどんなふうにつくられるか知らないなんて！

下北沢で放送局を作りたいと前々からいっていた「ぐう」の店主二人と、野菜づくりの女の人にも放送に参加してもらう。

野菜づくりの人は小田急の先（海老名からバスで30分）に三〇〇坪、土地を借りて、自分でタネから野菜をつくっている。これから出荷したいということ。その場で、セタガヤ・ママで売りましょうと約束。

4月18日

朝一番でコーヒーを二杯飲んで帰った古物集めのおじさんの話し。出物があったら家具など、セタガヤ・ママに知らせてくれます。

通りがかりの農大の女子学生がふたり、放送の途中で来店。後日、ここから自分たちも放送したいとのこと。願ってもないことです。

4月19日

近所の中学生の子どもが放送に興味があって、ラジオのメカニズムについて、いろいろ聞きにくる。それをそのまま放送。

4月21日

農大三年生の錦織さん、約束どおり放送。人前でしゃべることがやりたかったこと、セタガヤ・ママはなんだか興味をひかれる店だということなどを、寮と学校にいる自分の友だちに向けて説明。

①えたいのしれない店と店主たち。
②子どもがいっぱいあつまっている。
③これから木曜日に定期的に放送する。

4月22日

布花（造花）のひまわり、ねこ柳、届きました。

学研の母と子の雑誌『ベルママン』が取材に来てますので、そのまま放送。雑誌の特集テーマは「夫からも子どもからも離れた女のフリータイム」だそうです。だったら、テニスに夢中になったりアル中になる方が、手っ取り早いんじゃないの？

4月23日

セタガヤ・ママに置いてある売り本、貸し本は、一応、私たちが読んだものばかりで、ぜひ買ったり、借りたりして読んでもらいたい本ばかりです。藤本和子さんの『塩を喰う女たち』を紹介。

お客さん多数のため、そのまま店内放送。

4月25日

水牛楽団のテープを流す。「ポーランド禁じられた歌」

4月26日

昨日、高橋悠治さんが水牛楽団で使ったタイコ、ケーナ、バンジョーをセタガヤ・ママに寄附してくれたので、どんな音か、出してみます。

栄養たっぷりの自家製ふりかけを今日から売り出します。

中学生の女の子の話ではトイレに生理ナプキンの自動販売機が置いてあるそうです！

4月27日

農大生の放送日のはずなのに、連休のため国に帰ったという手がみが店に置いてありました。

先日の野菜づくりの堀さん、さっそく「よもぎ」に「むらさきつゆくさ」をもって来てくれましたので、今回は無料でお分けします。（天ぷらにしてたべたらうまかった）

来週の水曜日に私たちも畑まで、「いんげん豆」のとり入れに行ってきます。

セタガヤ・ママ放送は、お客さんとしてきてくれた人たちとの会話が中心番組になりそう。だから放送時間外に来たお客さんの話で、面白いのがあったりすると残念に思う。時間延長も考えている。

コンマからピリオドへ打ち直す

花村健一

一九六九年、僕たちの時間にコンマが打たれました。それから今年までの年の積み重ねは一九三一年から一九四五年までのそれに、ピッタリと符合するのです。

一九八三年夏――それを一九四五年と措いて、僕たちの雑誌「凱風」は新たな歩みを始めます。

凱風――凱という字、音からは「凱旋」ということばをすぐ思いつかれる人が多いようですが、凱風とは「春を呼ぶ南風」、そう辞書には書かれています。南風、西日本では「はえ」と呼んでいます。響きや字面とは異なり、何ともいえない温かみをもつことばだと思っています。

活字で何かを伝えること、少ないお金でそれが可能なこと――二つの条件をかなえるのは「出版」としか思いつきませんでした。「法人」を興して六年目の夏である昨年が「凱風」創刊の年です。それまで、一年半余りの間に五点ほどの単行本をつくりました。「傾向がバラバラだ」「何ていう〝出版社〟だ」そんな声を多く聞きました。

「まあ、待ってください、ジグザグしてても、いずれは、真っ直ぐな道を行くことになりますから」そんな風に答えていたのです。

その（直っ直ぐ行く）証しとしての「凱風」であったわけです。

でも、作ってみると、やはりジグザグ。ある熱心な読者からの手紙でもコンテンパンでした。

実は、この雑誌、「証し」として以外、もう一つ大きな誕生母体があるのです。

出版社としての形も定かでないころから始めていた研究会のメンバーがそれです。「現代中国文芸」の研究を続けていた、このメンバーの報告を定期的に行っていこう、併せて凱風社のやっていくこと、やりたいことを伝えよう――そう、大手出版社の出している、「波」「図書」とか、そんなもののつもりもあったんです。

しょせん、版元が出したいと思って出しているような本は、売れないご時勢ですから、売れないでもともと、そんな開き直りの気持ちを生来もっている好奇心とゴチャマゼにし

てつくり始めたわけです。創刊号――マアマア、そして二号――僕たちにしてみれば雑誌らしい顔付きになり（二号目からデザイナーに表紙を作ってもらったわけです）、研究会メンバー以外の人の原稿ものせ、「ヤリマシタ」という思いで、読者の批判を乞うたのです。それが、「コテンパン」の投書。

いや、実に有難かったです。雑誌を始めてよかった、本当に心から、そう思いました。伝えることに対して、真しに対応してもらえた。伝えたいことが伝わってないよ、と心からのことばで伝えられた気になりました。

単行本ですと、立ち上がりから仕上がりまで、どんな早いものでも半年以上、長いものになると何年間なんていうものがザラですね。そんな場合、一つ一つの本に、まさしくマルがつき、完結という気持ちになってしまいます。

ところが、隔月での雑誌。手間仕事を傍らでやりながらの作業なので、伝えたいテーマ探しと執筆者探し、依頼、受稿、制作。自分の持っている好奇心だけによって進んでいく、回転していく、続いていく、コンマの列というわけです。

そんなコンマの連なりと、ジグザクの中でやっと、核にすべきものを明らかにしていこうということになりました。

――アジア――がそれです。東アジア、琉球、中国、そして朝鮮。そこに生きている人々と、その風土を知っていこうということです。

この春、ヨーロッパを旅してきた若い人に聞くと、かの地の名所には日本語の看板が目立ち、イタリアのローマでは屋台のあんちゃんまでが日本語をしゃべってくれるということです。〝海外〟へ足を踏み出したことのない僕にとって、それは新鮮な驚きであり、想像もできないことです。明治以降、脱亜入欧を旗印にすすんできた日本の姿を、ちょうど鏡の裏から見る気がします。

いま、僕たちは脱欧入亜の道を歩み出すことにします。

世界史、日本史という形で歴史を習ってもけっして、東洋史という時間のなかったことをあらためて思いだします。

僕たちの東洋史の教科書として、第二次「凱風」を案内します。

一五年前に、ピリオドを打つことのできなかった人間がやっています。コンマの羅列から離れこれから凱風を出しつづけることによって、ピリオドが打てる日を迎えられると考えています。けっして、壮大なゼロに終わらせることのないように。

「精神的な安定を保ちながら変化（近代化）に対応する英知を与えてくれる源泉――それはとりもなおさず文化です」――これは、お隣りの国で刊行された『根の深い木』という雑誌の創刊の辞ということです。「文化こそ歴史の根」だとする、この雑誌の語っていることを、僕たちも同感とします。

最後に、今回作成した僕たちのパンフの中から文章を引用して、凱風からのあいさつにします。

大量生産、大量消費を前提とする近代社会が、いきづまりを打開するための手だてを見失って進むべき道を探しあぐねている今日、時代は、歴史の進歩とは何か、国家とは何か、人間社会とは何か、を再点検することを求めています。

また、人間にとって、他者と〝完全に〟理解し合うことはついにかなわぬこととは思いますが、そうとは知りつつ理解しようという欲求は、根源的な人間の在り方だとも考えます。その意味で、現代ほど人間ひとりひとりの生き方に大きな関心が寄せられている時代はありません。

マイ・ノート

私は女優

●文・写真　白井啓介

メイクは終わり、かつらをつけ
もう何十回、ひょっとしたら百回以上
同じことをやってきた
公務員だもの、仕方ない
それでも、いつもこの時の
身の引き締まる思い
緊張――そんなことばで表わせない
今日は、海外公演のプログラム審査
もう逃げ出したいほどの重圧！
時は、刻一刻と迫る……
正比例の法則に従う胸の高鳴り！
国家と人民のため？
祖国の栄誉のため？
そんなことじゃない……
さあ、客席のざわめきが聞こえる
今日も舞台が始まる
私、これでも女優だから

人々よ
私の言葉を聞いてください。
私は同胞を愛しているから
人間の存在を確認したいから
この暗い夜のなかで
燃えて小さく輝く
松明になりたいのです。
この暗い夜のなかで……

（一九六七年、焼身自殺したベトナムの少女、ファン・ティマイの詩。近藤昇訳）

本誌では、現代社会の〝ものさし（価値基準）〟を検証しながら、中国・朝鮮・琉球諸島を中心とした東アジア地域の社会を舞台にひとりひとりの人間がどう生き、どのように時代を見つめ、どのように時代を形づくっているのかを伝えていこうと思います。

父権的ロシアの女のたたかい

タチャーナ・マモーノヴァ

タチャーナ・マモーノヴァさんは一九四三年生まれ。レニングラード出身の画家で詩人。ソ連で最初の非合法フェミニスト雑誌「女性とロシア」を創刊し、その編集に携ってきました。結婚しており、七歳の息子がいます。

以下はこの二月二十三日、荻窪の「ぽろん亭」でひらかれたタチャーナさんをかこむ会の記録です。なお彼女の本『女性とロシア』は亜紀書房から出版されています。一二〇〇円です。

私は、一九七九年にソビエトのレニングラードで初めて地下出版されたフェミニスト雑誌「女性とロシア」の編集長です。

この出版は、KGB（国家保安委員会）に知られることになり、厳しい弾圧を受けて、さまざまな問題をひき起しました。その結果、私は一九八〇年、モスクワ・オリンピック大会の直前に、パリへ国外追放されました。

すでに「女性とロシア」は、十一ヶ国に翻訳され出版されています。これまでにたくさんの国々でソビエト・フェミニズム運動にかんする講演をしてまわりました。今回は、日本のフェミニズム運動について知りたいと思ってやって来ました。

ソビエトのフェミニズム運動はすでに十九世紀からありましたが、私たちの世代はその運動史についてはまったくなにも知りません。一九一七年のロシア革命からスターリン時代にはいる少し前まで、フェミニズム運動は続いていましたが、スターリン時代になると運動はまったく禁止されてしまったのです。スターリニズムは、ロシアではすでに社会主義が建設されたのだから、そんな運動はいっさい必要ないと判断をしました。この時、とくに、中絶が禁止され、ホモセクシアルが禁止されました。こうして次々と運動が抹殺されていったために、あとに続く私たちの世代はなにも知ることができないというような状況になってしまったわけです。

六〇年代――いわゆる自由化の時代になって、私はフェミニズム運動の思想を知りたいと考え活動をはじめました。その中で、多くの女性たちがお互いの情報を必要としている

こと、そのための手段としてどうしても出版物が必要であることを強く感じました。当時、当局に公認された雑誌の編集部に働いていた関係で、それらの出版社などにも働きかけたのですが、自由化の時代とはいっても政府の検閲は依然として厳しく、誌面に社会的な思想を反映することは不可能であり、公式に雑誌を刊行することもできないと悟らされました。そこで地下出版の刊行を提案したわけです。仲間を見つけようとしましたが、たいへん困難でした。というのも、その頃のソビエト女性たちはフェミニズムについて、なにひとつ知らなかったからです。私たちの刊行した「女性とロシア」は、年令、職業、思想を問わず、すべての女性に向けたものです。

とりあげているテーマは、家庭の問題、女と男の問題、生産点の問題（ソビエト女性のほとんどは職業婦人である）それと現在ソビエト社会で深刻な問題となっている。アル中の男が女に対してふるう暴力の問題などです。ソビエトでは、昔から、飲まなければ男ではない〟と言われるように、男性は非常にたくさんお酒を飲みます。そして育児や家庭内の雑用は男のやる仕事ではないと思っている人たちがほとんどなのです。そのため、女性たちにかかる生活の負担はたいへん多くなっています。

ソビエトの憲法や法律は合理的、進歩的、民主的で、もうこれ以上ないものと言われているにもかかわらず、現実に国を支配している法律は古いものばかりです。その中で女性は、旧体制の重荷と新体制の社会的義務の二重の重荷を背負わなくてはなりません。政府は、わが国の共産主義は確立されていると言い、共産党機関紙「プラウダ」は、ソビエト女性は共産主義建設に積極的に参加していると好んで書いているが、現実はまったくそうではありません。

女性たちの間では、外の仕事をやめて家庭に帰りたいという傾向が生まれてきています。この現象は、あまりに女性にかかる負担が多いためであり、政府の政策の当然の結果だと私は思います。

国家官僚とか、高い地位を得て働く女性はひとりもいません。女性が求められるのはいつも最下層の、もっとも汚らしく、もっとも重い仕事なのだというのがソビエトの現状です。もし政府が、社会主義や共産主義の原点である男女平等を現実化するつもりがあるのなら、現在の政府に50パーセントの女性指導者を入れるべきである。そう私たちは要求しているのです。

さらに私たちの雑誌がとりあげてきたテーマとして、中絶の問題があります。現在のソビエトでは、原則的には女性の意志によって三ヶ月までは中絶が合法化されています。しかし中絶の方法となるとひどいもので、多くの女性が恐れています。医療器具はお粗末だし、麻酔なしで、同じ部屋で一度に何人もの手術を行ったり……まったくお話しにもなりません。ソビエトでは、麻酔の手術はたいへん費用のかかるものです。〝爆弾は安く、麻酔は高い〟これが現状です。そして、平均十回以上もの中絶を経験する女性が非常に多いのです。このように数が多い理由にはさまざまな原因があります。

ひとつには性教育がまったくなされていないために、妊娠したことに気づかないほど性について無知であること。それと避妊具がほとんどないに等しいことなどです。ソビエト製の錠剤（西側で知られるピルではない）はありますが、体に害があるというので女性たちは飲みたがりません。コンドームもあることはありますが、想像を絶するほど品質が

悪く、さきほどの錠剤が健康に害があるとするなら、こちらは愛に害があると言えるでしょう。

私たちは、軍備に使う費用を女性の健康のために使ってほしい、そして中絶を医学的にきちんとしなくてはならないと提起しているのです。

地下出版の唯一の道具はタイプライターです。印刷所はすべて国家のものであり、出版物については政府の検閲が行われ、反体制・反動的なものはすべて押収されてしまいます。

私たちの出版のやり方は、まず一人が五部から十部ずつタイプでうち、それを友人に手渡します。それを受けた人はさらに五部か十部をタイプでコピーしてまた友人に手渡していくといったやり方です。ですからどのぐらいの発行部数があるのか、正確にはつかめていません。

しかし、政府はこのタイプライターさえも押収しようとする暴挙に出ています。特に地方都市などで、高値で生産台数の少ないタイプライターは、たいへん貴重なものなのです。これを押収されるということは、大切な宝物を失うことと同じことなのです。

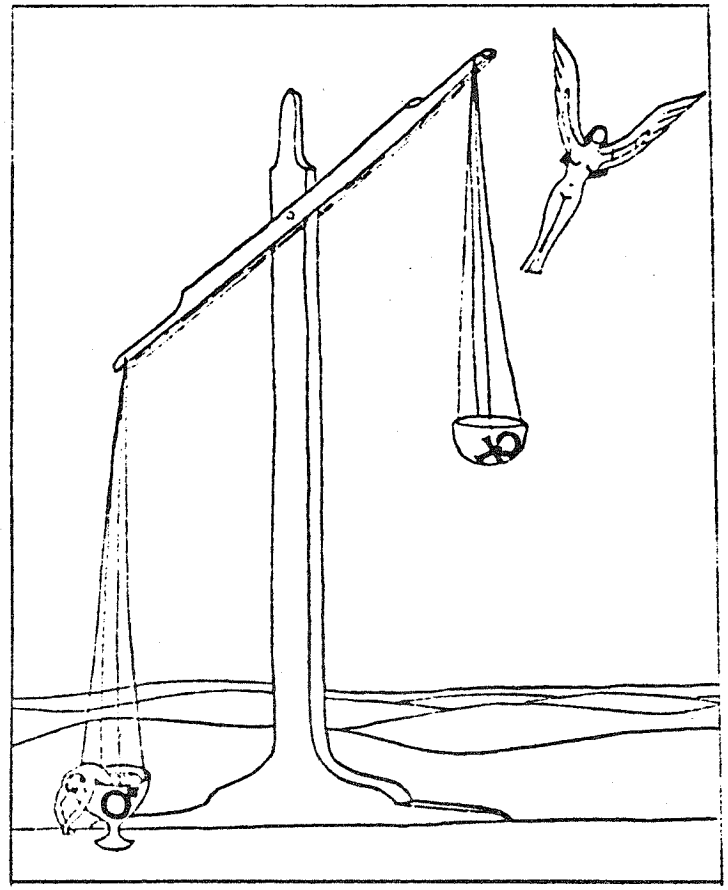
私たちの出版した「女性とロシア」は、ソビエト当局は無視していますが、各地の女性のあいだで大きな反響を呼びました。ソビエトにも、私と同じように考える女性が他にもたくさんいることを確信しているし、また、それを民主化と呼ぶことはまだできないが、社会の中でも少しずつ異った思潮が生まれつつあると思っています。

雑誌の刊行によって、私や家族や友人にとGB当局・民警とあらゆる方面から圧力がかけられています。にもかかわらず、私たちの地下ルートは健在です。ソビエト女性の現状と真実を伝えるために、いまもなお地下活動が続けられています。ソビエト女性は、世界中の女性たちの支援を必要としているのです。

ソビエトでは憲法上、男女平等で教育制度も平等であるなら、なぜ、女性は今日の自分たちの問題についてもっと強い意識を持たないのですか。

革命は行なわれたが、意識革命はまったく行なわれなかったということです。観念的な革命であって、現実に女性の意識は変らなかった。なぜなら、ご存知のようにソビエトは革命後、米国の干渉、国内戦、飢餓、生産力の低下によって弱体化していきました。その後、スターリニズムが生まれました。すでにお話ししたように、革命後もフェミニズム運動はわずかではありますが存在しました。しかし現実には民主化は一切ありませんでした。ヌーディズムも、ソビエトではかなり昔からありました。一九二〇年代には社会的にも、芸術運動の中でも、自由で実験的な時代がありました。しかしスターリニズムは、「ソビエトではすでに社会主義は建設されているのだから、そのような運動はいっさい必要ない。女性解放を志向するような運動はいらない」と判断したのです。この時から私たちは封建主義に逆もどりし、フェミニズム運動は真空状態となってしまったわけです。女性は良い母親として子供をたくさん産み、職場においては良い精神分子となろうというスローガンがたかく唱われました。

医者の半分以上が女性であると聞きましたが、彼女たちの手で、十回以上も中絶するというソビエト女性の現状を何とかできないものなのですか。



この質問は、たいへんしばしば聞かれます。西側では、医者という職業はたいへん高級な仕事なのだそうですが、ソビエトでは、医療と教育関係の仕事は給料もやすく、低級な部類にはいります。低いがゆえに、それは女性の仕事とみなされるのです。とりわけ医者という仕事を持つ女性の生活はたいへんきついものです。たとえばそれが結婚している女性なら、彼女は妻であり、母親であり、女であり、そのうえ仕事で診療し、手術をしなくてはならないのです。さらに医者としての技術を高めなくてはならないといった生活を強いられるのです。

私の友人の女医たちから、よく泣きごとを聞きます。医療機器が足りない、精密な器具がない、脱脂綿でさえ足りないと……。これもやはり社会的な経済問題と結びつくのではないでしょうか。女たちは働きつづけ、買物の長い行列にならび、エレベーターのない高層アパートを上ったり下ったり……。これらの問題を解決するには、女性たちはあまりにも疲れきっているのです。

中絶手術は合法的であるといわれますが、国家による費用の負担はどうなっているのですか。

爆弾は安く、麻酔は高い」というように、国の予算は軍事費に使われ、医療に対しては粗末なものです。どこで買物をしても軍人用の特別なレジがあり、軍人は身分証明書さえ見せれば、何でもまっさきに手に入れることができます。しかし、お腹の大きな婦人たちは長い行列に並ばなくてはなりません。すべてが軍事優先になっているのです。私もかつて妊娠した時、生活はきびしく、麻酔を使っての中絶を申し込みましたが、たいへん高い費用がかかるため、結局は断わらざるをえませんでした。

ソビエトの男性の暴行が問題となっているのに、暴行を受けた女性の訴えが一パーセントにも充たないのは、どうしてなのですか。

女性の方が悪いとされる場合が多く、それがいやで申し立てをやめてしまうのと、セックスについて話すことが今でもタブーになっているため、心理的な抑圧が大きいことが原因だと思います。しかし、申し立てがあった場合は裁判が行なわれ、強姦は五年～七年の刑となります。このような問題は国際的なレベルで、ソビエトだけでなくいろいろな国々に、女性を守るための共通の法律を作らねばならないと思います。

ソビエトでは、ポルノや猥せつな楽しみに男性はどのように対応しているのか、また女性はそのことについてどのように思っているのですか。

ポルノは禁止です。そのためと思いますが、言葉による暴力がたいへん多いです。たとえば道を歩いている見知らぬ女性に対して、男性が猥せつな言葉を浴びせることがよくあります。それを聞いた女性は、ポルノを見せられたと同じ、たいへんな屈辱を受けるのです。男性の間での喧嘩用語なども、すべての性的な言語を使います。これらの言葉を頻繁に聞かされる女性たちは、たまらない思いをするわけです。この現象は父権社会の共通の特長であると思います。

売春も存在します。地方の女の子たちが大都会に憧れ、モスクワやレニングラードの駅に立って、出張してきた男性をねらうのです。公式には売春は存在しないことになっているので、もしその女の子たちが見つかれば、徒食者という罪名によって逮捕されます。ところが党関係のエリートたち向きの職業売春婦というのがあって、なぜか彼女たちは逮捕されず、たくさんお金を稼いでいるのです。

性について話すことがタブーとされているそうですが、男女関係は実際にはどのように考えられているのですか。

結婚する前の男女のセックス関係はたいへん自由です。何の問題もありません。ソビエトでは、古代から結婚したら貞操を守らなくてはいけないが、結婚する前ならば男女のセックスは自由でよいという伝統があるように思います。

ホモセクシュアルについて、社会的現状は。

女性の場合も男性の場合も存在します。しかし、社会的に厳しく批判され、制裁を受けます。よく知られているところでは、バレーや音楽などの芸術の世界に多くみられます。このような世界ではホモセクシュアルも当然のように思われる社会風潮がありますが、

もし一般の人が発覚すると精神病院に投げ込まれないともかぎりません。このホモセクシュアルの問題を私たちの雑誌にもとりあげましたが、KGBなどから非難され、反体制派の中の権威者からもモラルの問題として厳しく批判を受けました。ホモの場合は法律によって投獄されたりしますが、レズビアンの場合はそのような法律はありません。しかも、発覚すれば精神病院へ送られるというのは冗談ではありません。

一九八一年の共産党大会ではじめて母子家庭の問題、未婚女性の問題などがりあげられたそうですが、そのことについて。

最近のソビエトは非常に離婚が多く、社会的にはもはやめずらしい問題でなく、注意も払われません。私の知り合いの家庭でも、ほとんど一回以上は離婚しています。権力は、このことを大へん不安がっていますが、離婚は増えるばかりで解決策はまったくありません。

未婚女性が子供を産むことについて、社会的批判はありますが、離婚した女性の母子家庭については、ごく普通のこととして扱われています。いろいろな理由で独身を通す女性もいますが、社会から受ける心理的な圧迫は強いです。離婚はしても、一度は結婚しているというのが〝普通の女〟とされています。

日本では、理想的な結婚の条件として、経済的に恵まれているということがよくあげられるが、ソビエトではどうですか。

もちろん、党幹部のようなエリートと結婚する人もいますが、一般的にそれは恥とされます。つまりソビエトの一般人の間では、経済的格差があまりなく、結婚する相手が金持ちであるかどうかが選ぶ基準にはなっていません。お金があるとすれば、それは党や国家のエリート、官僚たちを指すことになります。ソビエトでは、お金があることはその人の生き方、精神、すべてを物語っていることになるのです。

ソビエトの労働条件について。男女の職場におけるチャンスは同じなのですか。

同じでありません。男性がずっと有利です。たとえば、働く女性が妊娠すると幹部から除外されたり、ある職場でたいへん献身的に働き、能力もある女性が、当然そこのディレクターになると思ってたのに、突然別なところから現われた男性が指導権をにぎってしまう……このようなことに私たちはいつも驚いています。男女の賃金も労働法では平等とされているのに、現実にはポストによる格差があり、指導的なポストはほとんど男性の手に握られてしまうのです。

最後に、今回は日本のフェミニストの人たちが、私たちの詩や「女性とロシア」を訳し、ひろめていただいたことに感謝いたします。ソビエトの女性は、さまざまな理由で自由に女性解放について話すことができません。したがって、これからも真実を知らない人たちに情報を伝えていくことが私たちの重要な仕事であると思います。日本でも、ソビエトについての真実が知られていません。その意味でも、情報を交換しあい、お互いに刺激しあい、意見を出しあうことが重要であり、必要なことだと思うのです。

水牛通信　毎月1回10日発行　1983年5月10日発行　通巻47号　1980年5月23日第三種郵便物認可

編集後記

連休のことを忘れていて、今号は発行日がおくれてしまいました。勘弁して下さい。

これから何号か、カラワンのスラチャイの文章を連載します。次号は短編小説になる予定。詩「カラワン」は以前にも粗い訳をのせたことがありますが、今回が定訳。いずれも荘司和子さんの力によるもの。「貧民のキャラバン」はキム・ジハの大説「南」を連想させる。

イラストは「森」での生活を、モンコン・ウトックが思いだしてかいたものです。カラワン回想録のおくれた挿絵として見てください。原稿がたりなくなった急場を、いつもカラワンにたすけてもらう。

セタガヤ・ママは前々号で試験電波をだして以来、順調にラジオ放送をつづけています。

ニューヨークにいっていた粉川哲夫さんの報告によれば、アメリカではすでに微弱電波によるFM自由ラジオは禁止されてしまっているとのこと。日本でもいよいよ郵政省が禁止をめざして、電波法の改訂を準備しはじめたらしいです。

隔月発行　凱風　同時代の民衆史を記録。

■5・6合併号発売中
（目次より）
巴金（パーチン）　刘間文俊　訳
『随想録』第二集（真言語集）より
自らを解剖する
佐藤忠男
中国映画私見
傅雷（フーレイ）　白井啓介　訳
『傅雷家書』より
わが子は異郷にあり
定価四〇〇円（送料二〇〇円）

・7号目次より
〈特集〉
もうまわり道はごめんだ！
――一九八三年における戦争状況
●中国残留日本人孤児問題のその後
●戦時下の在日朝鮮人映画人の軌跡
●アジアに対する日本の戦後責任

〈第七号以降の発行体裁〉
発売日毎奇数月15日　判型菊A5判
頁数毎八八～一〇〇頁　定価毎七〇〇円

〒一〇四東京都中央区銀座一―二〇―二　松村ビル四階
株式会社　凱風社
電話〇三―五六七―五〇三〇

＊予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用して下さい。
口座名、水牛編集委員会
口座番号、東京四―九一七九二
購読料、一年分三〇〇〇円（送料共）
半年分一八〇〇円です。
＊住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。
＊本誌は次の書店にあります。
模索舎（新宿）☎三五二―三五五七
木風舎（阿佐谷）☎三九八―二六六六
信愛書店（西荻窪）☎三三三―四九六一
アール・ヴィヴァン（西武池袋12F）☎九八一―〇一一内線二九五六
名古屋ウニタ書店　☎七三一―一三八〇

水牛通信　第五巻第五号
一九八三年五月十日
定価　二〇〇円
発行人　堀田正彦
発行所　水牛編集委員会
〒154東京都世田谷区新町2―15―3　八巻方
電話〇三（四二五）九六五八
振替口座東京四―九一七九二
印刷所　㈱トライプリントショップ